

奈良高専 図書館だより

目次

1. 図書館利用のすすめ
梅原 忠
2. 読書感想文コンクール
総評と作品
3. 学生アンケート
4. 図書室からの報告

1988年2月 奈良工業高等専門学校図書室 発行

図書館利用のすすめ

図書館委員 梅原 忠

本年度の図書館委員として、時々図書館の利用状況等の調査の為に巡視することがある。一部ではあるが、他の高専、大学と比して利用者数は余り多いとは言えない。年度当初より、授業等で今年は特に演習問題の解答作成、設計課題のデータ調査を図書館を利用して行うようにしてきたが、まだまだ十分に利用されているとは思えない。

私が数年前にカリフォルニア大学に留学していた時、大学内の理工系図書館をよく利用した。蔵書数、図書の検索方法等大学図書館と大きな差はあるが、本校図書館も今後、より利用し易い図書館とするための参考となるものが多かった。その一例として、基本的に開架図書室は、本校と同じであるが、実験レポート等の作成をグループで討論しながら出来る様にガラス張りの部屋が別にあった。図書室内では他人の迷惑にならないよう静かに読書等をする事は当然であるが、時には、友人と議論することもあると思う。また、読書、レポート作成等の合間は気分転換のために軽読書コーナーへ足を運び、ゆったりとしたソファで頭を休めるなど、図書館で長時間過ごせるよう工夫されていた。非常に便利であり、多くの学生が利用していた。

本校図書館も、学生会図書委員会によるアンケート結果を参考に、諸君らの希望を少しでも実現できるよう努力中である。1月からは、開館時間の延長も試みられる予定である。今まで時間がなく図書館が利用できなかったと答えた人、ぜひ利用して欲しい。

図書館へ足を運べば、そこに何かがある。最新の情報、知らなかった事、何かを得られる所である。

昭和62年度

読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会

毎年行われている夏休み課題図書(4・5年生は自由選択)の読書感想文コンクールは、今回で12回めになります。応募作品474編の中から、図書館委員会と国語科の先生方が慎重に選考した結果、次の

ように、10名の諸君の入選作を決定しました。氏名をここに紹介して、その榮譽をたたえたいと思います。

〔第1部：文学の部〕

最優秀	2	C	竹川 弘子
優 秀	3	MB	増井 政樹
佳 作	4	MB	林 竜一
佳 作	1	MA	山田 悦司
佳 作	3	MB	田中 泰宙
佳 作	1	MA	細井 紀夫

〔第2部：文学以外の部〕

最優秀	1	C	羽原 登世
優 秀	2	E	嶋津 博至
佳 作	3	MA	池浦 誠
佳 作	1	I	岩倉 康哲

この他に、選考の過程で優れた評価を得た諸君は、次のとおりです。氏名を記してその努力をたたえたいと思います。

1 MB	豊田 哲郎	1 MB	竹広 草生	1 E	藤田 大作	1 E	藤原 秀樹
1 I	関 努	1 C	樺 善徳	2 MA	逸崎 博紀	2 MA	新村 貴志
2 MB	大東 博之	2 MB	村上 耕平	2 E	松井 健	2 I	中牟田浩志
2 I	増井 幸彦	2 C	辻本 達哉	3 MA	西垣 勝	3 E	横井 正俊
3 E	伴 拓弥	3 C	信野 和也	3 C	杉野 光生	4 MA	加藤 佳治
4 MA	横山 忠雄	4 MB	藤原 英樹	4 E	井ノ上康博	4 E	石田 聡
4 C	植木 利也	4 C	飯田 康博				

今年度は、選考の仕方を少し変えました。従来も、課題図書は、文学の部と文学以外の部に分けていましたが、入選作を選ぶ段階では両部門を一括して扱い、入賞を決めて来ました。その結果、入選作は文学の部に偏り、文学以外の部を課題図書として課することの意義が見失われがちとなりました。そこで今年度からは、この両部門を独立させて2部立てとし、それぞれの部門で最優秀、優秀、佳作を選ぶことにしたのです。

応募の状況を見ると、4・5年の自由選択は68編でした。1～3年の課題図書の応募は406編で、その内訳を数の多い順に並べると次のとおりです。

〔文学の部〕

海になみだはいらない	(灰谷健次郎)	94
三四郎	(夏目 漱石)	86
七瀬ふたたび	(筒井 康隆)	84
くるま椅子の歌	(水上 勉)	16
光る壁画	(吉村 昭)	15
ガリバー旅行記	(スウィフト)	13
さようなら	コロンバス (F・ロス)	7
父と子	(ツルゲーネフ)	3

〔文学以外の部〕

アインシュタインが考えたこと	(佐藤 文隆)	33
笑いの人間関係	(井上 宏)	17
ケジメの時代	(木村尚三郎)	12
戒厳令下チリ潜入記	(G・マルケス)	11
茶の本	(岡倉 覚三)	8
子どもたちの太平洋戦争	(山中 恒)	4
朝鮮人女工のうた	(金 賛汀)	2
わたしの少女時代	(宮城まり子他)	1

この中から、第1次選考をパスした作品について、更に選考を重ねた結果、上記の諸君を入選作に決定したわけです。選考の最終段階では、11人の先生方が書き手の氏名を伏せて読み合わせ、投票によって決めました。何学年の作品か、学年も考慮に入れています。学年を無視して対等に扱ったのでは、上級学年の方が有利になりがちだからです。

総じて、応募作品はどれもよく書けており、努力と苦心の跡がうかがえました。その中でも特に入選作は、自分の目でしっかりと見、深く考え、的確に表現しており、優れたものとして高く評価できます。次に、その入選作を紹介しましょう。

〔第 I 部 文学の部〕

「ガリヴァー旅行記」を読んで

2 C 竹川 弘子

面白い話だ。読んでいく途中で思わず苦笑させられ、何かしら心の奥までズシンと響いて来て、忘れられない言葉が多かった。

「ガリヴァー旅行記」は小さい頃から知っていたが、小人国や大人国以外にその続きがあると知ったのは、そんなに前のことではなかった。むしろ今回読んで知ったことの方が多い。昔の記憶にたよって読んでみようと思い読み始めたが、これがまた面白く、とても二世紀も前のものとは思えないくらい現代の私達に強く訴え、自然と通じ合うものがあるように思えた。

作者スウィフトが作り出した世界、これは実在しない。しかし実在しないと分かっている、そこに読み手をのめりこませてしまう。またこの話の中には、作者の、しつこいまでの社会に対する不満や反発が出ては来るが、読み手に何の反感も持たせないでうなずかせてしまう筆法がある。

リリパット国での卵の割り方。プロブディンナグ国での、人間を拡大して見た時はこうであろうかとも思える描写。ラピュータの男性の無力、女性の痴愚。バルニバービの愚かな研究者達。グラブダブドリップで見た先人達の実際と、それに見事なまでに合わない歴史の数々。ラグナグにいる不死人間の実体。フウイヌム国のヤファー。フウイヌム国以外のすべての国に共通する政治問題。それに、どこの国へ行っても必ず出て来る汚物に関する問題等々。

これらは、いつの時代の、どこの国にでも共通する問題で、読めば読むほど、現代の私達の生活や考え方にそっくりであることに気づかせられる。そしてそっくりであるが故に一層嫌悪感がわいて来もする。この点は、ガリヴァー氏がヤファーを見た時と同じ心境であると言ってもいい。

はじめのリリパット国では、笑える所がたくさんある。しかし、旅行記が進むにつれて、笑ってばかりはいられないような問題が次々と姿を現わしてくる。それがフウイヌム国では頂点に達し、作者は、ガリヴァー氏の口を通して私達に様々な問題を投げかけてくる。些細なことでも憎みあったり、けなしあったり、揚句のはてには戦争という

ことをやらかす人間。その人間のあらゆる行動に対して、作者は批判しているように思える。卑しく愚かな人間、醜く救い難い人間、しかし愛すべき人間である。どんなに嫌であっても、人間に生まれた以上、どこまでもこの人間を愛してゆくより仕方がないのである。

作者は、人間を嫌いになってもらいたいと本当に思って、この旅行記を書いたのだろうか。

この旅行記の中には、確かに人間の仕出かす悪事の数々が書き込まれている。それは、スウィフトの生きた時代だけではなく、現代の我々の生活にも、そのまま当てはまることと言ってよい。確かに昔に比べれば文明は発達し、その恩恵を受けて我々の生活水準は上がった。しかし、人間そのものはちっとも賢くなっているとは思われない。むしろ、そのすばらしい能力を退化させてしまって、自らの本能が命ずるまま行動してしまう、最も低俗な生き物となりつつある。しかも自分達で作り出した化学兵器で自らを滅亡への道へと導きつつもあるのだ。

「ガリヴァー旅行記」は、単なる旅行記ではない。人間社会という大きな海を、ガリヴァーというその名のとおり愚かな者を使って旅をさせた記録のような気がする。その海の中には、作者によって悪事の数々を数えあげられるような人間がやはりいた。しかしその反面、理想ともいべきフウイヌムもいた。つまり人間とは、美と醜、善と悪、いつもこの二面を同時に持ち合わせた生き物なのだ——そう作者は言いたそうである。

良い面もあり、悪い面もある愛すべき人間。作者スウィフトは人間のいやらしさ、醜さをいやというほど書いた。しかしそれは、かえって人間をいとおしむ気持ち、限りない愛の別な表し方だったのではないだろうかと思われる。両親の愛を満足に受けることのできなかったというあのスウィフトの……。

「くるま椅子の歌」を読んで

3 MB 増井 政樹

この物語は、障害を背負った子と若い夫婦の苦悩と闘いを描いたものである。僕はこれを読んで、日本の福祉に対する甘さに悲しくなり、一方母親の強さに感激した。

脊椎破裂という障害は原因もわからず、一万人

にひとりというものだけに、夫婦の悲しみは非常に大きかっただろう。初産をひかえた美弥子の期待と不安の入り混じった心中は、男である僕にも伝わってきた。健康でさえあればよいと誰もが最後に祈る出産なのに、美弥子は丈夫な赤ん坊を産めなかった。「何故、何故このような子なの」という悲しみとくやしさに負けず一心に乳をやる姿に心を打たれた。手術の結果は足首から下が死んでおり、尿はたれ流し、水頭症、股関節脱臼。これらの障害を背負って生きてゆかねばならない子の前途に希望などないのに、闘う美弥子が哀れに思えて仕方がない。それなのに、子の足が治ることを信じて毎日一年間も病院に通い続けた日々は、どんなに苦しかっただろう。もし自分がそんな子供をもった時、こんなに歯を食いしばって耐え続ける自信があるかどうかわからない。

美弥子の苦悩は赤ん坊のことだけでなく、夫妻助との夫婦関係にもあった。要助は障害児を持つたくやしさを誰にぶつけることもできず、頭から子に対して絶望感を持っているから、美弥子の行動を冷めた目で見ているのだと思う。ますます美弥子は孤独になり、ずいぶん寂しい想いをしただろう。少しもよくならない子を投げ出したいと思ったこともあるはずだ。でも最後まで頑張れたのは、親としての責任感と、それ以上に、初めて対面した赤ん坊が生きる気迫を見せて自分の乳を吸う姿を忘れることができなかつたからだと思う。

でも、要助が仕事先の山奥の集落で障害児を持つ親に接して、死ぬまで家に置いてやることだけしかできない地方の状況に、初めて施設の必要性を感じ始めてくれたのは、美弥子にとってとてもうれしかっただろう。

知人の紹介で知り合った小島医師によって子供が立つことができた時、美弥子は天にも昇る気持ちだっただろう。これまで暗かった家庭や夫婦関係のことも忘れさせてくれたと思う。小島が言った「障害を持っているからと言って社会に甘えてはいけぬ。生きている部分を活かさなければ」という言葉は、その通りであることはわかるけれども、そのように社会復帰させられるような施設がどこにあったのか。高度経済成長期と言われた時代に、国立の施設が一つもなかったのはなぜなんだというくやしさを、作者は言いたかつたのだろう。

この本を読んで、母親の決して屈することのない愛は、どんな苦境をも乗り越えていくことがはっ

きりとわかつた。また、現在もそのような多くの女性が奮闘していることに声援を送りたい。そして、一般に冷たいように見られている男性としても、もっと頑張らねばと思う。施設がなくてくやしい思いをした人々の分まで強く生きなければならぬと決心した。

「異邦人」を読んで

4MB 林 竜 一

「人間の寿命は、なぜ何十年もあるんだろう。」本を読んでいると、時々本とは全く関係のない事を考え始めるのが僕の癖です。「5～6年だったら、やりたい事をするのに。」これが今回思った事の一つです。そして「今、自分はやりたいことをやっていないのではないか？」と気付きました。もう一つ、僕は本の世界と現実を一緒にする癖があります。「三毛猫ホームズ」を読んで猫に話しかけたり、「スーパーマン」を読んで飛ぼうと思ったり、他の人もこんな事はあるのでしょうか。

ところで、この話の主人公ムルソーの母親は、一行目から死んでいました。ムルソーは母親を深く愛していましたが、彼は非常に自分に素直だったので、無理に悲しんだりしません。これが僕なら、やはり悲しむでしょうが、考えてみると、それは自分に対してで、親に対してはどうでしょうか。人は死ぬのが当然で、それは不幸ではないと僕は思っています。ムルソーは世間の慣習や一般論に汚されていませんでしたし、母親は、彼にとって必要ではありませんでした。つまり彼は母親に対して純粋な愛だけを持っていたので、その死を悲しまないのは、当然とも言えます。また彼は自分の欲求にも素直でした。親の死体の前で（彼にとって死体には意味がなかった）煙草を吸い、ミルクコーヒーを飲み、次の日、海水浴に行き、映画を見て、女と関係を結びました。周りの人は彼を非難しましたが、何故悪いのか理由があるのでしょうか。彼は真実に対して素直なのです。ある時マリイという女性がムルソーに結婚しようと言いました。彼は彼女を愛していませんでしたが、結婚してもいいと迷わず答えました。彼はそんな取り決めにも無関心なのです。彼女は全てを承知の上、結婚しようと言いました。そんな時事件が起こりました。ムルソーが人を殺したのです。裁判の結果は死刑でした。

本を読んでいくと、始めムルソーの常識外れが忌々しいのですが、それが次第に消えていき、気付いてみると、彼以外の人間が忌々しくなっています。大体、常識に意味があるのか、真理とは存在するのかが疑わしくなります。時々思うのですが、今、物事を考え、判断しているのは自分自身なのだろうか。外から自分に入れられた知識が考えているのではないか。そう考えると、自分という物が無くなってしまいます。結局、欲求が最後に残りますが、この欲求に素直に行動すると、大抵は非難されます。人間は自由だと言いますが、自由にすると、ブツブツ言われます。「他人に迷惑をかけない。」という最低限のモラルさえ守れば何をしてもいいように思いますが、そうもいきません。それでどうするかというと、皆と同じ事をして、知らぬ間に意味もないモラルから外れた人間を非難してしまうような気がします。結局、自分に嘘をつきながら生きて、その嘘を真実と取り違えているのではないのでしょうか。

ムルソーは死刑になっても幸福でした。でもマリイはどうでしょう。裁判中もなお結婚を望んだ彼女は、自分の口から彼に不利な証言をさせられます。そして彼の死刑、この話の中で本当に悲しい思いをしたのは彼女です。彼女にそんな思いをさせたのは誰でしょうか。

この本を読み終えて、ムルソーは、とても幸せな人間だと思いました。彼は、母親が死に、殺人を犯し、死刑になったけれども、僕には彼はとても幸せに思いました。彼がとても人間らしく見えました。できれば、僕も彼の様に生きたいと思いました。

「くるま椅子の歌」を読んで

1 MA 山田悦司

なぜ、この本を選んだのかというと、僕は最近、障害者に関心を持ちはじめたからです。というのは、今年5月の連休に神戸で下宿している僕の兄が、障害者を1人、家に連れてきたのです。その人は現在27歳のAさんで、先天性（生まれた時から）の脳性麻痺で、両手足が自由に動かないのです。それでも頑張っているのです。そこで「くるま椅子の歌」も、きっと、くるま椅子にのった障害者が一生懸命に生きていくような内容だろうと思って読みはじめました。

妊娠中の美弥子は初産だったせいもあり、身体を大事に大事にしていた。ところが、生まれてきたのは、背中に大きなこぶをもった脊椎破裂の女の子だった。そのために家庭は暗くなっていく。だが美弥子だけは、その子を一人前にしてやろうと、生まれて間もない藁子に、背中のこぶを取る手術を受けさせてみた。こぶは取れた。が、しかし、神経の故障のために、足首から下は死んでいて、たれ流しをするということだけは、どうしようもなかった。

それならどうかして施設に入れてやろうと思った美弥子は、日本には数少ない障害者施設を調べてみるが、18歳以下であることや、一級障害者という理由で、入れてもらうことができなかった。そんな時、同じ障害児をもつ沼田よし子の紹介で、小島という立派な医師の所へ行ってもらうと、「このお子さんは歩きます」と言われ、次の日から訓練しはじめた。すると、わずかな期間で藁子は立てるようになり、「くるま椅子を使わなくても、松葉杖で歩けるようになる」といわれる。はじめ、悪魔の子だといってあきらめていた美弥子の夫の要助も、しだいに希望をもちはじめ、家に部屋を1つふやして、小さな施設を作ろうとまでいうようになる。

とまあ、僕の予想とはかなり違いましたが、藁子が生まれる時の話や要助が仕事で知り合った戸越米太郎の娘も障害者で、歩けず、小便もできないために18年間も土蔵に入っていた彼女を要助が見た時の話などは、読んでいる僕の手がブルブルふるえるほど心を打たれました。

僕の兄の話では、施設にもいろいろあって、トイレに行く時間や回数まで決まっている所や、世話役の人たちの気分次第でかなり差がある所もあるらしいのです。だから施設に入れても、幸せでない人もいます。

兄は、週に何度かAさんの家へ行き、料理をしたり、いっしょにテレビを見たりしているそうで、Aさんの方も、兄を友達だと思っているらしく、言葉が不自由ながら、テレビ番組でケンカしたりしていました。そんな2人は、仲のよい兄弟のように見えたが、御飯を食べさせたり、トイレに連れて行く時は、かわいそうでした。僕には兄のような奉仕活動はできないなあと思うと同時に、そういうことをしている貧乏大学生の兄を誇りに思い、僕自身もできる限り協力していきたいと思っています。

「ガリヴァー旅行記」を読んで

3MB 田中泰宙

小さい頃に読んだり聞いたりしていたガリヴァー旅行記は、小人の国に流れついたガリヴァーの滑稽な話だけで、単なる童話だと思っていた。しかし、削除されない本来の形の原作を読むと、そこには別の次元のメッセージがあった。

ガリヴァー旅行記は、名誉革命などの時代、市民の意識が変わり、権利を主張していた時代に書かれた。また、そのころには、理想社会の姿を想像したユートピア思想の本も多数でいた。このガリヴァー旅行記もそういったものの一つであり、愚者を意味するガリヴァーという人物の旅行見聞記という形も、他のものと似ている。

ガリヴァー氏の行く先々の国の体験記は、さまざまな諷刺や喩えが含まれている。それは、イギリスの政治や宗教、王室などの諷刺から始まり、最後には、人間そのものの性質の、もはや諷刺とは言いがたいところまで及んでいる。その間じゅう、人間の行動の愚かさ、汚さや、際限もない欲望など、人間の性質とはこんなものなんだ、ということが、それこそ、もう止めてくれと言いたくなる程、これでもか、これでもかとしてくる。確かに、人間の愚かさというものは、ある程度はわかっていたが、これだけ見せつけられると、人間というものは、全くどうしようもない代物だ、とでも思いたくなってしまう。

特に最後のフウイヌム国渡航記は、すさまじいものだった。なにしろ、相手は人間ではなく、完全なる理性をもった馬で、その国には、ヤファーという姿、形から性質まで嫌悪を極めた動物がいて、これが人間であるということになっている。ガリヴァー氏がフウイヌムに自国の話をする際でも、それに対してフウイヌムのする批判は人間以外の者の目であるから、完全に客観的な批判が返ってくる。これはもう諷刺の域ではなく、人間に対する弾劾ともいえるものであった。人間の行いを詳しく説明しようとするほど、いかにそれが愚かで理にかなっていないかということがあらわれてくるのである。しかも、それを否定したくても、否定できないのである。そして、一人フウイヌムの習性を身につけ、賢者となったように見えたガリヴァー氏も、イギリスへ帰った後、人間の

汚臭に堪えられず、妻子までも嫌悪し、馬に安らぎを求めるといふ、精神異常の状態にされて、やはり名の通り愚か者になっている。人間とは、こんなものだ、と言わんばかりである。

作者は、フウイヌム国を理想のユートピアとして、人間とは愚かでどうしようもない者としているようである。しかし、私は人間を必ずしもそんなものだとは思わない。この本では、人間の温かい感情などの素晴らしい部分が、無視され過ぎではないかと思う。悪い部分のみを批判するだけでは片手落ちだと思う。また、フウイヌムたちはなるほど完全なる理性を持っているのかもしれないが、私にはそれが良いのかどうか疑問である。例えば、フウイヌムたちは死別の際に悲しむということがないし、温かい感情にも少し欠けているように思う。

この物語では人間の悪い部分のみを強調しているように思う。確かに、人間の汚れている部分は否定できないが、希望は持ちたいと思う。作者のスウィフトは人間嫌いだったのだろうか？ しかし、ここまで人間の愚かさを出しているというのは、人間を愛したいのだが、悪い部分ばかり目について愛せない、といったことの表われではないかと思う。

「ガリヴァー旅行記」を読んで

1MA 細井紀夫

スウィフト——神の御言葉を説く聖職者でありながら、またブラックユーモアを吐く道化でもある人間。

スウィフトは、ガリヴァー（愚か者）という人物の荒唐無稽な国々での数奇な体験や見聞を通して、そのなかにイングランドの社会や政治に対して、また、人類の存在そのものに対して痛烈な風刺を折込んでいる。ガリヴァー旅行記は、まさに端倪すべからざる人間の端倪すべからざる作品だと思う。

小学生の頃、削除してあるこの作品を面白く読めたことを覚えている。それで、削除されていない形のこの作品を読みたくなった。子供に面白く読めることはまた、大人にも面白く読めることだろう。また、作者にも子供と同じような、幼児性があったと思う。

自分が大人に、また、小人になったと思ひ込め

〔第Ⅱ部 文学以外の部〕

「子どもたちの太平洋戦争」を読んで

1 C 羽原登世

ぱりリパット（小人）の国でその国の住民を踏み潰しそうになったり、火事が起これば独特な方法で消したり、プロブディンナグ（大人）の国でその国の住民に踏み殺されかけたり、クリームの中で溺れかけたり、ラピュータ（飛んでいる島）の奇妙な種族に会ったり、グラブダブドリッブ（魔法使いの島）では、今までに死んだすべての者のなかから、幾人かを地上に呼びだし、適当な質問をして答えてもらったり、フウイヌム（馬）の国に行っているいろいろと喋り合ったりするのは、非常に現実的なことだと思う。だから僕は、たとえどんな大人であっても、童心にかえれば、空想の世界で十分に遊ぶことができると思う。

しかし、作者は荒唐無稽な国々のことを書いているが、原作を読む時、そこにはしぜんと、別の世界があらわれてくる。その中にはしきりに汚い物がでてくる。人間が腐敗堕落していることをえぐりほじくりだそうとする作者の風刺が、汚いことをもちだしてくることは十分に理解できる。小人の国でも、大人の国でも、ラガートの国でも、その国々の住民は人間であり、また、馬の国のヤフーもいちおう人間である以上は、汚いところがあることを強めているのは特に不思議ではないと思う。しかし、作者の風刺も時たまでてくるだけならまだしも、しょっちゅう出てくるとなると、次第に不快感が募ってきて、読んでいて僕の作者に対する嫌悪の情といおうか、不安がふつつとわきあがってくるのを感じた。確かに人間は嘘もつくし、裏切りもするし汚いと思う。だが、スウィフトの筆は人類の存在そのものにまで及び、ほとんど風刺の樫をつきぬけており、何か身震いするようなものがある。僕には、ガリヴァーがスウィフトなのではないかという気がしてならない。ガリヴァーが馬の国から帰ってきた時人間嫌いになったように、スウィフト自身も、人間が嫌いだったのではないだろうか。

だから作者は、人間ではない生と死を冷静にするどく深く見通している理性的で清廉で美德の数々を実践しているフウイヌムの国を、作者なりに、一つのユートピアとみていたのだらう。しかし、僕には、作者の馬の国を一つのユートピアとみる考えが、精神に異常をきたしていると思えない。ガリヴァーは異常な経験をした末に人間嫌いになったが、僕はどんなことがあっても人間嫌いにはなりたくない。

私がこの、山中恒著「子どもたちの太平洋戦争」を選んだのは、同じく山中氏の「ボクラ少国民」を少し読んだことがあったからである。しかし、読んだと言っても、パラパラと数ページをめくってみて、難しい言葉が沢山あるのに嫌気がさし、4分の1も読むことができずに諦めたのだった。それに「子どもたちの……」は、「ボクラ……」よりも読みやすそうであったし、何よりも山中氏の作品が好きであったのでこれに決めた。

この本を読んで、まず思ったのは、“おもしろい”であった。戦争の悲惨さとは関係なく、子供達は強く生きている。山中氏自身の体験を中心に、当時の子供達・社会の様子がわかりやすく書かれている、と感じた。

本文の中に、時折当時の子供達の作文が載せられているが、それを読むと、少し怖い感じがした。まだ小学生の子が、天皇を敬う文を立派に書き切っている。私が小学生だったら、こんなものは到底書けないだろうと思ったが、そんな小さな子どもが、こんな文を書けるようにした、日本の徹底した軍国主義の教育ぶりが空恐ろしいものにまで感じられる。しかし本文中に、山中氏自身の作文があり、その大部分が担任によって修正されていたように、これらの子供達の作文も、修正されたものなのかも知れない。

冬の寒い中を、ランニングパンツ・裸足で「正常歩の訓練」をさせられ、足の裏が霜で痛くなり、思わずガニ股で歩くと教師に突きとばされる。同じように「整列」も訓練ばかりさせられる。つまり戦争当時は、学校の本来の目的である勉強を通り抜けていたのである。

私はそんな状態を馬鹿げているとは思ふ。そんな馬鹿なことはない、と今なら主張しているだろう。しかし、私がもし、この時に生まれていたのなら“寒さのため、全身紫のぶち色になり、齒の根が合わずがくがくふるえながら”も、周りと同じように天皇陛下の御為と信じ切り、反抗することさえ思い浮かばなかつただろうと思ったりする。

この本で山中氏は、あまり知られていない戦時中の生活を写し、ファシズムを否応無しに強制さ

れた子供達こそが、戦争の被害者であるということ
を言いたいのであろう。それは、本書の中で、
くり返し語られていることである。

私はこの本を読んで、太平洋戦争の知らない一
面を知らされたと思う。

中学時代、戦争についての勉強を随分した。日
本が中国などに対して行った事実、戦争が激しさ
を増すにつれ日本が孤立した状態、そして原爆、
被害の状態。中3の時には長崎へ修学旅行もした。
しかし、それで知ることが出来たのは表の部分に
過ぎない。

ところが山中氏は、「子供」にスポットを当て、
裏の部分、つまり命令される側の、戦争の陰の部
分を写しだしたのである。これによって、今まで
私達が知ることの出来なかった戦争の、本当の主
人公の気持ちをはっきりと汲みとれるのである。

山中氏は自分の子供時代での事実だけを述べ、
そのことによって戦争の馬鹿々々しさを訴えてい
るのだろう。そしてその馬鹿げたことに巻きこま
れ、それを信じていた自分自身を嘲笑しているの
ではないだろうか。

今までにもしていたが、私はこの本をきっかけ
にもう一度“戦争とは何か”を考えてみたいと思
う。そしてもっと奥深く知るために、再び「ボク
ラ少国民」シリーズに挑戦するつもりである。

「ケジメの時代」を読んで

2 E 嶋 津 博 至

今の時代、素晴らしい人材が少ない。その人材
をつくり出し、明日の日本を明るい方向へと変え
ることのできるものが「ケジメ」だ——そう筆者
は語る。

「ケジメ」——確かにそういう言葉は最近あま
り耳にしなくなった。しかし、少し前までは、親
や先生によって、そんな言葉を聞かされたような
記憶がある。その時は何ら不思議とも思わず、た
だ何となく聞いていた。「ケジメ」という言葉に、
全くの無関心だったのである。しかし、やがては
社会人になろうとする現在、ぼくは「ケジメ」と
いうものに少しは関心を持つようになった。それ
が、この本を選んだ理由のひとつでもある。

そこで、「ケジメ」とは何か、考えてみよう。
大人の人たちは、「ケジメ」という言葉の本当の
意味を知っているのであろうか。おそらく、わかっ

ている人はごくわずかであろう。ぼくも知らなかつ
たうちの一人であるが、この本を読んで、少しは
理解できたような気がする。大人も教育者として
の立場において、「ケジメ」を知るために、この
本を読んでおいた方がいいと思う。いや、ぜひ読
んでおかなければいけないと思う。

読んでいて、まず興味をひかれたのが、「支配
するものと支配されるもののケジメ」である。そ
の代表的なものとして、人間と機械の関係が挙げ
られる。もちろん、支配者は人間、被支配者は機
械である。これは誰が考えても絶対であろう。機
械が人間を支配することなど、考えられない。し
かし筆者は言う。機械の完全自動化ばかり考えて
いたのでは、自ら身を持する能力が後退して、人
間がいよいよダメになってしまう、と。

人間は支配者としての自覚を持って機械を支配
しなければならないのである。最近、人間は機械
に頼りすぎていて、どちらが支配者かわからなくな
っている。だから筆者は、このままでは人間にと
って必要な野性のカン、つまり第六感だけでなく、
五感までが損なわれていくのではないかと、と
危惧しているのである。人間と機械とのケジメを
つけ、人間のできることはできるだけ人間がやり、
そういう身近なことから、「ケジメ」をつけると
いうことを始めていかなければならないのだ。

ところで、人間同士の間ではどうであろうか。
この場合、一般に「支配者と被支配者」という言
いはよくない。人はすべて法の下に平等である
からである。しかし筆者は、あえてそういう言い
方をしている。ぼくは、初めこれを差別ではない
かと思った。今まで差別だけを学んできて、ケジ
メというものをよく知らなかったからである。そ
のために、差別とケジメの区別さえもつかなくな
ってきていたからである。

確かに、人間はみな平等である。しかし、かとい
って何もかも同一視してはいけない、と筆者は
言っているのである。差別をすることはよくない
が、自他の違いを認識することは大切である。平
等といっても、人間はやはり、一人一人物の考え
方や生き方が違う。そういうことを認識しながら、
かつ、まわりと手をつなぎ、共に生き合うことが
最も望ましいのだ、また、それを理解してこそ、
初めてケジメがつけられるようになるのだろう。
この精神こそ、日本の地位を世界で高くする上に
最も必要なものだと思う。そして、そのケジメを
つけることのできる人格を養成すること、それこ

それが、新しい時代環境に応じていますぐにも改革すべき日本の教育である、と筆者は述べている。

教えられ考えさせられることの多い本であった。少し賢くなり、心も豊かになったような気がする。

国際化——「茶の本」よりの考察

3 MA 池 浦 誠

「茶の本」は、茶道の意義やルーツ、また、美意識などを、外国人向けに解説したものである。不完全なものに完全を、質素の中に美を見るこの思想を作者は、世界に誇るべき東洋の文化の一つとして紹介している。外国向けとは言いながら、日本人である僕にとっても、興味深い本であった。

さて、僕がこの本を読み終えて、まず気づいたことは自分自身がこのような美や調和と全く別の世界に生きているということだった。つまり、茶道という一つの文化が、身辺から失われていたということである。

改めて考えると、これは茶道に限ったことではない。古には尊重された多くの文化が、古くなり、不要になったという理由によって、あるいは忘れられて、消えてゆきつつある。

日本という国は鎖国をといてから、あるいは第二次世界大戦後、文明面において急速に進歩した。国際化を言い、他国に追いつこうと努力した結果である。

ところが、それが何故か、文化面では良い結果を出していない。むしろ、独自性のある古い文化や思想は、時とともにおとろえている。たとえば能、文楽などは保護を必要とするようにさえなっているし、仏教、儒教なども、思想としてはすでに死んでしまったと言ってよい。「日本の文化」と呼ばれるものは生活の中には見られなくなり、「勉強」しなくてはならないものになった。

その原因として考えられることは、国際化ということに関する誤解である。

日本が開国後にまず行ったことは、科学文明の輸入と政治の改革だった。また、その後の明治政府は富国強兵を言い、他国と肩を並べるだけの力を持つことを目標としてきた。(この時は国際化といわず、脱亜入欧と言っていた。)

戦後には民主主義が輸入され、戦前を切り捨てる形で、日本の立てなおしがはかられた。

どちらの場合にも共通して言えることは、外国

の文明、文化をとり入れることに力を注いでいたということである。その時に、外国と同じようになることが国際化だと、勘違いしたのではないだろうか。

その国際化は文明面では成功し、日本の工業力などは大いに上がった。文明というものが輸入できるものだからだ。しかし、文化というものは、そのままでは輸入できないものだ。自ら育てるか、あるいは自分なりに消化してとり入れるかしくはならない。日本の場合には、急いで外国と並ぼうとしたためか、また新しいもの好きの国民性のためか、多くのものをとり入れることだけにこだわったように思われる。「茶の本」の作者はこれについて、「こわばったカラヤ丈の高いシルクハットを得ることを、西洋の文明(ここでは、文明、文化の両方をさしている)を得ることと心違いをしていた」人のことを書いている。この人の姿は、諸外国に学ぼうとしていた時の、日本の象徴ではないだろうか。僕はその姿にイソップの犬を見る気がする。川に映った自分から肉をとりあげようとしたために、自分の肉をも失ってしまった、あの犬である。

それでは、本当の国際化とはどのようなことなのか。この本の中の言葉をいくつか引用してみようと思う。

「いつになったら西洋が東洋を了解するであろう、否、了解しようと努めるであろう。」

「お互いにやわらかい気持ちになろうではないか。お互いに違った方面に向かって発展してきているが、しかし互いに長短相補わない道理はない。」

国際化ということに関する問いの答えはここに表れていると思う。東洋が西洋を、西洋が東洋を了解すること、すなわち、自分と異なるものをも認めることだ。そして学ぶべきものは学び、しかし独自性を失わない態度だ。

今また国際化ということが、教育の場などで言われている。しかし、英語をうまく話すことや、元号と西暦の使いわけにこだわったりすることよりも、異っているものを素直に認められる心の態度を重視しなくてはならないのではないだろうか。すべての理解や交流はそこから始まるのだから。

そして、自らの文化を、伝統を守ってゆく心もそこから生まれるのだから。

「茶の本」に書かれた文化を、もう一度自分のものとして、とりもどしたいと思う。

「笑いの人間関係」を読んで

1 I 岩倉 康 哲

この本は“笑い”ということについて、実に多くの事が書かれています。著者の井上宏さんは、笑いが人間関係にどんな役割を果たすものであるかという点に絞ったと書いていますが、それだけ“笑い”とは多様な役割を持つものなのでしょう。笑いというものは、私達の日常生活上ではあたり前のことですが、そんな身近な題材にひかれて読んでみました。

この本では、まず“人間は笑う動物”という章から始まります。笑いの種類、赤ん坊の笑いは生得的なものか、笑いについての民話や神話、笑うとどれくらいエネルギーを使うかなどを紹介し、この後にも、日常生活の中の会話、外国の政治演説やスピーチから引用したり、実例を挙げたりして、本題に入る前の予備知識としています。この中には、誰もが経験しているようなことや、著者の生まれ育ちが大阪であり、私の近所のことなどが例の一つとして挙げられていることなどもあって、なかなか説得力がありました。引用される人物も、漫才師からレーガン大統領と幅が広いのです。

文中に“攻撃”としての笑いと、“協調”としての笑いということが述べられています。“攻撃”としての笑いと、笑うことにより相手の権威を低下させようとする笑いで、その典型は諷刺であるそうです。

著者はこう言います。笑いが“攻撃”として意識されやすいのは、身分・階級・階層なりの上下関係が強いタテ社会においてであり、日常生活を支配する原理が上下関係を基本としている社会では、人々は、まさにその上下関係にこそ気を遣わなければならないのである、と。

また、タテ社会では、それを支える規範や習慣、価値体系の緩むことを恐れ、笑いに対して警戒心を緩めることができないのであり、強いタテ構造の規範に則ることで成り立っている社会ほど、笑いに対して警戒的であると言える、と書いています。

これに対して“協調”としての笑いは、相手に対する親和を表わし、敵対的でないことを示す笑いで、笑い合うことによって仲良くするのであるそうです。笑いを“協調”として受けとりやすい

社会では、人々が気を遣うのはヨコの関係であるといえるでしょう。日本の公的な場では、多かれ少なかれタテの人間関係がもちこまれます。そこで日本人の公的な場では笑いはタブーであり、これが外国人達に、“日本人は笑いを知らない”と思わせる原因となっているのでしょう。

この本では他に、笑いの効用として4つの作用を挙げています。ひとつに親和作用。お互いが笑い合うことにより仲良くなることができ、気持ちが落ち着くものであり、笑いを共にすることで、親密感がいっそう深まる思いがするというもの。また、親和作用に関係し、笑いの誘引作用というものもあります。これは、人が笑っている所を見て自分も笑いの輪の中に入れてもらいたいと思う、というものです。解放作用という笑いの作用もあります。自分をしばっていた何かを笑うことにより、自分を解き放つ、というものです。

私がこの本を読んで思う事は、普段、何気ない笑いの中にこれほどの意味があるとは気が付きませんでした。また、何故日本の公的な場では笑ってはいけないのか、不謹慎だからだろうという以外は考えたこともありませんでした。私の身のまわりにもタテ社会はたくさんありますし、ヨコ社会もあります。これからは“協調”としての笑いを大切に、“攻撃”としての笑いに気を付け、潤いのある人間関係をつくりあげていきたいと思えます。



A. A. ミルン「クマのプーさん」
(岩波少年文庫) から

(問8) 本以外のカセットテープ(音楽用)やビデオ、あるいはカセットブック(カセットテープ化された本)などももっと備えて欲しい、と思いますか。

ア はい イ 適度に ウ いいえ

ア 40	イ 44	ウ 16
------	------	------

(問11) 全校的な読書会が開かれたら参加したい、と思いますか。

ア はい イ 場合による ウ いいえ

ア 5	イ 52	ウ 43
-----	------	------

(問1) 諸君は、図書館をどの程度利用しているのでしょうか。「ほぼ毎日」と答えた人は、全体の1割います。月に1・2度程度の人まで含めると、74%の人が利用していると答えています。一方、図書館とは無縁の学校生活を送っている人も、4人に1人の割合でいることが分かります。どう利用しているのでしょうか。(問2・3)について見ますと、館外借出しより館内利用中心であり、半数の諸君が、自習・レポートの作成のためと答えています。

図書館で利用する本(問4)の1位は、専門書です。学年別の集計では、当然のことながら、高学年になるほど専門書の利用率が高いという結果が出ています。専門書に次いで利用率が高いのは、雑誌・新聞です。もっと備えて欲しい本(問5)の項でも、専門書と雑誌・新聞の比率が高くなっています。

(問5)に関連して、どんな本を備えて欲しいのか具体的に書く(問6)の項では、様々な本が挙げられています。特に雑誌では、スポーツやバイク関係のものを中心に、その多様さにはびっくりさせられます。要望には出来るだけ応えてあげたいが、予算や展示スペース等の関係もあって、なかなか難しいのが実情です。その点、理解して欲しいと思います。友人に薦めたい本の項(問7)でも、実に多様な本が挙げられていました。購入図書や課題図書を選ぶ際に、参考にしたいと思います。

以上を要約すると、本校生は、1・2週に1度は図書館へ行き、専門書を利用して自学自習したり、レポートを書いたりしているが、一方、雑誌や新聞など軽読書のためにも、かなり利用してい

る——アンケートからうかがえる、本校生の平均的利用の実態は、ざっとこんなところです。

さて、図書館は、本だけ備えておればよいのでしょうか。カセット・ブックやビデオ・マガジンに代表される、最近の、本の視聴覚化傾向からすれば、(問8)の結果は予想されたところでした。図書館もまた時代の要請に応じて、書物一辺倒のあり方から、次第しだいにその姿を変えていくに違いありません。もっと備えて欲しいテープやビデオの項(問9)では、洋画などを具体的に挙げていました。これは、図書館そのものの視聴覚化という問題とも関連して来る事柄です。

図書館への要望(問10)の項でも、CD・LDなどの充実やその貸出しの問題、さらには、自由に使えるパソコンやAV機器・システムを備えて欲しいとの要望が、幾人かから出されていました。こうした要望は、今直ちに応えることは出来ませんが、近々取組まなければならぬ図書館の将来構想の中には、当然取入れられる問題です。視聴覚関係の機器も備えられ、広くゆったりとした憩いの空間もあって、誰にでも喜んで利用されるような図書館が、早く実現して欲しいものですね。

開館時間を延長して欲しいとの要望も、比較的多くありました。この問題については、図書館委員会で、今検討しているところです。実際に利用者が多ければ、延長してあげたいのですが、職員が手不足の現状では、容易なことではありません。その点も理解して欲しいと思います。その他にも、要望は沢山ありました。出来ることから、順次実現させて行きます。

諸君も協力することによって、よい図書館を築き上げて行きましょう。

次に、学生会図書正副委員長から寄せられた感想を掲載します。

「アンケート」の結果を見て

学生図書委員長 都 司 剛 清
副委員長 加 藤 継 男

「図書館に関するアンケート」の集計結果についての感想を記します。

利用状況を見ると、週に1度から、月に1・2度といった所を回答者の半数が占めており、残りを“常連”ともいえる学生と、ほとんど行かない者とで、二分しています。この割合が、他校と比べてどうなのかは知りませんが、今後アンケートを継続して行って比較して見ると、図書館利用の変化がよく分かると思います。

利用目的は、自習・レポート作成が多く、これに伴い、専門書の利用が群を抜いています。また、専門書の充実や、古い本の入換えを望む声が多く出されているので、ぜひ配慮して欲しいものです。

その他の要望では、開館時間の延長がトップで、夏の早期冷房、コピー機の設置、冷水機の設置とつづき、もっと大きな図書館を望む声もかなりありました。図書館の利用方法として、館内利用中心が6割弱を占める以上、ぜひ改善してもらいたいことです。強く望まれたCD・ビデオ等AV関係の充実(図書館のレンタルショップ化)は、残念ながら、予算その他の事情で無理だと思われる。

主に利用する本の2位が雑誌・新聞で、図書館に遊びに来る人の多くを占めていると思います。バイク・車・スポーツ等の広範囲にわたり、種類の増加が望まれており、“憩いの場”をめざして努力してもらいたいものです。

読書会についてのアンケートでは、積極派はわずか5%で、(奈良高専らしい)ごく普通の回答だと思えます。

最後に、「近ごろの図書館は、やかましい。」という意見があったことを報告します。

皆さん、静かに利用してください。

「アンケート」結果について

図 書 室

上記のアンケートや結果について表面に出なかったことなど、気のついたことを補足して書いてみました。

(問1に関連して) 年度により利用は変動しているなかで、年々減少の傾向にあることは前にもかきました。このアンケートは利用を高めるための対策を探りたいという一つの手段でもあります。統計上、他校に比べて、当校はそれでもまだ上位にあります。これからもこの線を維持してほしいと思います。その中で毎年何人か「本好き」がいて図書館員を喜ばせています。

(問4・5に関連して) 利用を高めることを目的に学生の要求を入れると、専門書や参考書の予算が減ります。限られた予算の配分内で、利用か、又は、高専にふさわしい蔵書がよいか、貴方はどっちに比重をかけたらいと思えますか。

(問8について) AV資料はますます重要になっています。当校図書室の規模、スペース、設備、予算、人員等を考えると、頭を抱えたくくなります。

(問11について) 昭和60年秋、志賀直哉原作「赤西蛭太」について「映画と読書の会」を催しました。機会があったらまた、という計画が出たり、引っこんだりしています。

(その他) 当校は、狭いと言うことでは全国高専中、下位から1・2位ということですが。レポートや自習のように静かな環境を必要とする読書と、雑誌、討論、ダベリングのようにリラックスして利用したいという二者を同居させるのは無理があります。狭い、やかましいという意見は切実だと思います。10年近く前から拡張について討議されているのですが……。

この他、見やすくという要望に答えて、夏期中、利用の少ない書籍を室外に出しました。何年か後の改修が終るまで多少の不便を我慢してください。

更に、利用者が直接必要な本を手にとって選んだり、親しんだりするために開架式になっています。当校では積載に堪える部分が限定されており、見やすいように分散配置することができにくいのです。

(最後に) アンケートは、ごもっとも、いうものから、24時間、土・日曜日も開けて欲しい、畳の

部屋、お茶・ジュース、まくら・ふとんなど、訳のわからないもの、つられていい加減に書いたとしか思われなような回答もありました。

利用者の真面目な希望は、図書館員の希望でもあり、期待に応じて実現可能なものから生かして行きたい、と、図書館委員や図書館員は改善の為に努力しているところです。

毎度のことですが、蓄積された読書は、歳と共に貴方の人生を豊かにし、必ずやお役にたつものです。「気配り」の鈴木健二アナウンサーが「知るは人生の楽しみなり」とおっしゃっています。辰年の今年、座右の銘としては如何でしょうか。



全国図書館大会に参加して（報告）

深まりゆく秋の日比谷公園で、(10月28日—30日)第73回全国図書館大会が開かれました。全国各地から集まった22高専、37名の図書館関係者は、1.「高専図書館における電算化について」2.「夜間開館について」3.「全国高専図書館協議会の課題について」の3点について、事例発表を基にして、熱心な討議を行いました。以下に、私見を含めた簡単な報告をします。

1. (事例発表は、和歌山高専)

参加高専22校のうち、なんらかの形で電算化を実施しているのは11高専で、その他は、検討中、準備中ということでした。限られた予算と人員で、なかなか思うような電算化ができないというのが、各校共通の悩みのようなものでした。

しかし、金沢高専が、金沢工大との協力体制による完全電算化ですと答えられた時は、分科会会場のあちこちで、驚きと羨望の嘆息が聞こえました。

2. 文部省費用で、昭和53年度から夜間開館を行っている舞鶴高専から実状報告を受けました。全寮制であることも大きな原因でしょうが、利用は可成あるようです。中途半端な延長は、問題が多いという他高専のアドバイス等もあり、とても参考になりました。(本校では、目下、週4回開館時間延長の試行を行っています。学生の皆さんは、夜間開館が一日も早く実現するよう、せいぜい利用して下さい)

3. 「高専教育の使命達成に寄与するため、図書館活動の活発化」という目的に沿って、高専図書館協議会が発足しました。今後、全国の高専図書館が、足並みを揃えて、情報交換等相互協力体制を結ぶことにより、ますます発展していくであろうことを確信しました。

(図書室、福井洋子)



(世界大百科事典15、平凡社 から)

読書週間の展示「シルクロード・ミニ」について

図 書 室

62年秋の読書週間は、63年4月に開幕する「シルクロード博覧会」に因み、関連する書籍等を展示することが決まりました。当校が所蔵する書籍は、それが紀元前から開通し、交通が今日的発展を見るまで東西を貫通する長い歴史の時間を経て来たものですから、九牛の一毛といってよい程の少なさです。

シルクロードの終着駅、と称される正倉院の宝物は、同時期に奈良国立博物館では恒例の「正倉院展」として開催されておりました。当校では博覧会準備事務所から地球のドテっ腹を買っている地図パネルと、呼び物となる中央アジア出土遺物の写真パネル数点を拝借し、更に職員持ちよりの書籍も加えてカッコつけました。PRは手描きのポスターなどを校内に貼り出しましたが、熱心に見てくれた学生は残念ながら多かったといえませんが、済んでしまった今も、返却後手描きの地図が出ていますが時々見ている学生もあり、博覧会期間（4～10月）中、様子を見ることにしています。

〔ミニ解説・シルク・ロード（絹の道 Silk Road（英）Seidmstrasse（独）とは？）〕

古代中国の特産「絹」が西方の国々に運ばれた隊商路をさした雅称。ドイツの地理学者リヒトホーフェン Richthofen が用いて以来定着している。

漢の武帝（B.C.156～87）が、西域経営使として張騫（？～B.C.114）を起用、13年にわたる困難な旅から持ち帰った物産・情報から、以後東西交渉の主要路となり、彼我の文物交流の舞台となった。我国へは遣隋・唐使、留学生等により、仏教東漸とともにもたらされた文物の主要なものは1300年を経た今「正倉院」に在ってシルク・ロードの終着駅といわれる因になっている。

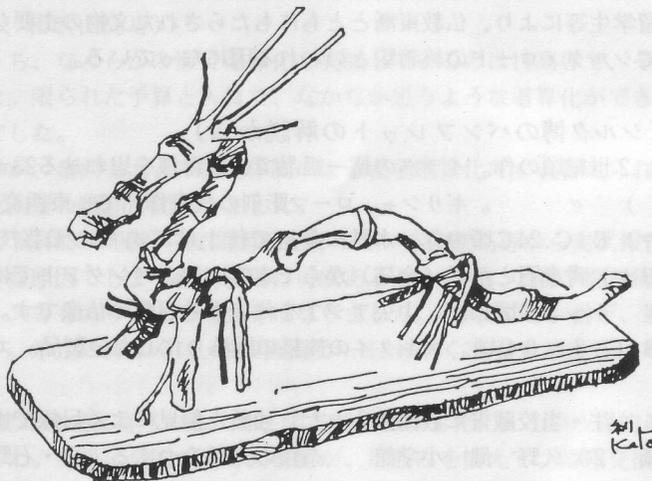
〔借用したパネル〕（シルク博のパンフレットの解説から）

- ウバル像（イラク）2世紀頃の作。イラクの超一級品で、観音様を思わせる23mの彫像。
- ビーナス像（ " ） " 。ギリシャ、ローマ彫刻の代表作品で、東西交流の証を思わせる。
- 人頭牡牛像（シリア）B.C.24C頃の作。木質に金箔で仕上げられており、工芸技術の高さが分る。
- 獅子頭の怪鳥（シリア）青金石と瀝青（金箔）からできている。ペンダントではなかったか？
- 三位一体像（ソ連） 1～3C頃の作。中央アジアを代表する石彫の仏像です。
- 黄金の鹿（ソ連）B.C.7～6C頃。スキタイの族長の盾飾りにした金製品。エルミタージュ博蔵

〔展示した書籍の目録〕 注・当校蔵書に数冊借入れた。独断と偏見による目録です。順不同。

法隆寺（原色日本の美術 2）	久野 健	小学館	奈良の大仏をつくる	文・石野、絵・井口	小峰
正倉院（ " 4）	土井 弘	"	上代日本染織史	明石染人	思文閣出版
法隆寺と斑鳩の寺（日本美術全集2）	学 研		日本染織史	"	"
高松塚と藤原京（ " 3）	"		文化大革命の中国出土文物	朝日新聞社	"
正 倉 院（ " 5）	"		シルクロード 絲綢之路 1-12	日本放送出版	
三 彩・緑 釉（日本陶磁全集5）	中 公		東西文明の交流 1-4	平凡社	
正倉院の楽器	正倉院事務所 編	日 経	シルク・ロードー過去と現在	白水社	
ペルシャのガラス	深井晋司・高橋敏	淡交社	シルクロード地帯の自然の変遷	保柳睦美	古今
正倉院の宝物（太陽 臨増刊）	平凡社		ペルセポリスから飛鳥へ	松本清張	放送出版
大 和 路	入江泰吉写真集	創元新社	遙かなるブータン	NHK取材班	"
サハラ悠遠	野町和嘉写真集	岩 波	西城・聖地カイラス巡礼	"	"
正域発見の絵画に見えたる服飾の研究			雲南・少数民族の天地	"	"
	原田淑人	東洋文庫	大黄河1、遙かなる河源に立つ	"	"
東西文化の諸相	前嶋信次	誠文堂新光社	黄河源流を探る		読売新聞

シルクロード 旅をする本	朝日新聞	ネパール百描	内田良平	小学館
東大寺の大仏(日本の美術5) 小林剛	平凡社	ガラス (別冊太陽)		平凡社
シルクロードと正倉院(〃6) 林良一	〃	チベット Tibet	中国上海美術出版編	ベース
広開土王陵碑の研究 李進熙	吉川弘文館			ボールマガジン社
チベットの文化 R.A.Stein	岩波	アラビヤ科学の話(岩波新書 549)	矢島祐利	
西城の秘宝を求めて A.Y.Yakubovskii	新時代社	埋もれたシルクロード(〃769) B.M.Masson		
シルクロード発掘秘話 P.Hopkirk	時事通信	イスラーム (〃333)	蒲生礼一	
シルク・ロード紀行 松田寿男	毎日新聞	インド文明の曙 (〃619)	辻直四郎	
砂に埋もれたシルクロード 増田精一	新潮社	中国の科学文明 (〃759)	藪内清	
シルクロードの謎 前嶋信次	大和書房	中国の数学 (〃906)	〃	
ガンダーラへの道 樋口隆康	サンケイ出版	ヒンドゥ教とイスラム教(〃漢8)	荒松雄	
私のシルクロード(岩波Gra.) 平山郁夫	岩波	イスラム哲学の原像 (〃119)	井筒俊彦	
長江の旅 中国人民美術出版社	美乃美	マルコ・ポーロ (〃69)	岩村忍	
敦煌石窟(NHKブックスC17)	田川純三	中近東 (〃287)	甲斐肆馬	
仏像のきた道(〃C24)	久野健	中央アジアの歴史(講談社現代新書)	同	
ガンダーラの美神と仏たち(〃C28)	樋口隆康	さまよえる湖(旺文社文庫596)	Sven Hedin	
仏像 心とかたち(〃20、30)	望月信成(等)	東南アジア史(みすず双書19)	Brian Harrison	
仏教文化の原郷をさぐる(〃473)	西川幸治	黄河 中国文明の旅	小松左京	徳間書房



(「岡登貞治編著・十二支の文様」から転載)

〔編集後記〕

年があらたまり、始業式が済んだと思うともう半月近く経とうとしています。24号は何時よりも盛り沢山で、嬉しい悲鳴をあげながら編集に手間どりました。

学生図書委員諸君の努力の結果によるアンケートについては、既に出来るものから着手をはじめています。狭い館内を少しでも広く、とか、配列を見やすく、希望図書(マンガなど)、さらに1月11日(月)から図書館委員と協力して開館時間の1時間延長を試行しています。

4月からは希望のあったウォーカーラーの他、ブックポストの設置が実現するように努力しています。又、電算化に伴うバーコードの貸出しが4月からスタート出来る様にガンバッテいます。本が“アクビ”をしないうちに、さそいあわせて図書室の利用を活発にしましょう。